

高等教育機関における学習支援空間のゾーニング

照屋 香菜子

近年、国内外を問わず学習支援空間の構築が注目されている。高等教育機関では大学図書館による総合的な学習支援、学習・教授法の転換、情報通信技術の発展による学習メディア・ツールの多様化という変化に対応した学習支援空間として、ラーニング・コモンズが普及しつつある。ラーニング・コモンズの特徴であるワンストップ・サービスを実現するために有効な方法としてゾーニングが挙げられる。

本研究では高等教育機関における学習支援空間のゾーニングについて、空間構成要素に着目して考察することを目的に、英国の JISC (Joint Information Systems Committee) による全国的プログラム・プロジェクトの報告書またはガイドラインを対象に文献調査を行った。JISC とは、情報技術を活用することによって継続・高等教育機関における学習や研究、教育を促進するための組織である。具体的には、“Designing Spaces for Effective Learning: A guide to 21st century learning space design”、“The Designing and Management of Open Plan Technology Rich Learning and Teaching Spaces in Further and Higher Education in the UK”、“Planning and Designing Technology-Rich Learning Spaces”を対象に、学習支援空間デザインを計画するにあたって考慮すべき空間構成要素について調査することで、ゾーニングの意義と効果について考察した。

文献調査の結果、空間構成要素を (ア) 家具、(イ) 照明等の光環境、(ウ) 暖冷房・換気システム、(エ) 音環境、(オ) 情報通信機器、(カ) 色彩環境、(キ) 装飾の 7 項目に分類し、それぞれの特徴と学習支援空間デザインに取り入れる際、考慮すべき点を明らかにした。空間構成要素の特徴に着目したゾーニングによって期待できる効果として、1) 各空間の機能やその空間で行われる活動の目的を示すこと、2) 利用者の行動の自己管理を促すこと、3) 学習意欲を高めることの 3 点が挙げられた。また、ゾーニングにより機能別に分けて配置された空間内の利用者も、その空間の機能や活動目的を示す空間構成要素として機能することや、大学のシンボルとしての学習支援空間を構築する手段としてゾーニングが活用できることを明らかにした。

これらのゾーニングによる効果のうち、「各空間の機能やその空間で行われる活動の目的を示す効果」および「利用者の行動の自己管理を促すという効果」が、学習支援空間のワンストップ・サービスに由来する物理的側面の問題に作用していることが推察できる。利用者は、空間構成要素から与えられる情報によって、自身の持つニーズに対応する空間を適切に選択できると考えられる。また、利用者の行動の自己管理を促すという効果によって、多様なニーズに対応しつつ、それぞれの機能を確立する空間が構築されるため、利用者にとって快適な学習環境を維持できると結論づけた。

(指導教員 呑海沙織)